



『俳句 憑憑』

相生町区 野中 威



「こんにちは」声を掛けられる。声の主はジャージ姿の高校生。やや遅れて挨拶を返したが、気分は爽やかに変わった。これが挨拶の効用でしうか。

その挨拶は俳句のテーマの一つです。数年来、俳句の前講座の講師をして、俳句の作り方・鑑賞の仕方・俳句会を指導すると、その面白さや楽しさを実感し目を輝かせる

受講者がいらつしやる。

また、小中高校生の俳句大会への応募作品の選考に携わの中で、しばしば気になるのは、固定観念にとらわれた俳句が夥しいことでした。添削を加えれば佳句になります。しかし、全体的には、俳句を作る為の基本的な理解ができていないのでしようね。

俳句は世界一短い一行詩。作り方・鑑賞の仕方には、基本的な約束事を習得することが必要です。大きく三つの約束事があります。

- (1) 一句に「季語」を折り込むこと
- (2) 五・七・五の十七音の「定型」に収めること
- (3) 一句の中に「切れ」を入れること

これらを毎日の作句活動の中で一つ一つを身に付けていきましよう。四季折々に際し感動したこと、気になったこと、目に付いたことなどの事柄をメモし内容を句にする。(2)(3)は一定量の俳句に接していく間に馴れていくものです。特に(1)の季語の理解は大切なんです。季節を連想し、安定感や存在感を持っていますよ。古くは万葉の歌人、室町の連

歌師や江戸の俳諧師たちにより選別され、磨き上げられた歴史を持つ詞です。日本人の持つ美意識の集大成が俳句歳事記。読むだけでも面白い。楽しみながらマイペースでコツコツと続け、俳句仲間をもつこと。息の長い気持ちが大

事なんです。俳句を作ること、季語を理解し吸収すること。一つ一つの季語の本意が分かると、身辺りの地味で何の変哲もない空間が明らかに変化していく。季節の移り変わりに敏感になる。身近な小動物や植物に親しみを感ずる。物事を観察する眼が、少しずつ鍛えられ養われる。そしてその先にある審美眼を育てることになるんですから。

俳句は、日々の風土・生活を詠うものです。折り込まれる季語は、千年以上にわたる伝統的な習慣やそれに伴う感情、美意識を内蔵している。俳句作者は、それを受け入れ共有しています。

だからこそ、他の文芸や芸術と異なり、少数から大勢の座の中で、作者になり読者になる。共同の理解が可能になる。実はこのことが俳句作者にとり、深い感動や喜びや楽しさや励みになり、俳句の魅力を得るのです。さあ、騙されたと思って俳句を僕と一緒に始めてみませんか！

俳句

小諸俳句会

- 夜学果て一両電車一人かな 工藤 貢
- 雪吊りの縄のあそびの手馴れかな 井出 芳子
- 強霜の屹立妻のひとりごと 塩川 正
- あはあはと嬰の爪切る小六月 石田 経治
- 日向ぼこの母置き去りにしてしまひ 大池 知恵
- だれか来て薪足す月の湯浴かな 国見 敏子

短歌

短歌新潮こもろ会

- 長らえて飲びは面に哀しみは 萩原さち子
- 心に秘めて春の大地に 柿沢 仁子
- 黄昏れて埒へいそぐ鴉たち 饗場 陽子
- 相つぎて二人の叔母の身罷りぬ 佐久台地ひろき雪野にからまつの 神津喜三子
- 裸木のれつ青空を突く 小 靖子
- 蒸し芋箆に湯気立ちほくほくと 田中 恵子
- 食欲そそり我肥ゆる秋 夕映えのサイドミラーに映りいて ひとつ腸物心を満たす